

2016年熊本地震により被災した自治体職員の Posttraumatic Growth(PTG)に関する臨床心理学的研究

小川 祐葉

I 問題

1) 災害時の心理的負担

近年、我が国では地震災害が各地で起こり、2011年東日本大震災や2016年熊本地震などいずれも甚大な被害をもたらした。全国知事会(2016)によると、2016年4月14日21時26分頃、熊本県熊本地方の深さ約11kmを震源とするM6.5の地震、熊本県上益城郡益城町において震度7の地震が発生したことにより、住まいや街を破壊し、心と体に著しいストレスを与えた。自治体職員、救援・支援者を含め、熊本県民は長期間の緊張状態にあった。

2) Posttraumatic Growth (PTG) とは

外傷後成長 (Posttraumatic Growth ; PTG) とは、「危機的な出来事や困難な経験における精神的なもがきや闘いの結果生じるポジティブな心理的変容の体験」(Tedeschi & Calhoun, 2004)をいう。PTGは①他者との関係、②新たな可能性、③人間としての強さ、④精神性的変容、⑤人生に対する感謝、の5因子からなり、精神的なもがきや闘いの末に、認識の変化をもたらす何らかの認知プロセスが生起してPTGに至ると想定されている(北村ら, 2012)。

3) 自治体職員の現状と課題

高橋(2018)によると、行政職員は災害後、被災者の怒りの矢面に立つことが多く、疲労が重なる中でも懸命に被災者の対応をしているという。自らが被災しながらも自治体職員として働かざるを得ない彼らの心的ストレスや精神的負担が懸念されている。自治体職員など支援職に対する心理的支援は精神的負担を軽減させるために必要な活動である。また自治体職員自身も、失ってしまった基本的な生活を取り戻すとともに先の見えない将来を志向し、PTGを促進できるような支援を受けることが大切である。

II 目的

本研究では、2016年熊本地震により被災して約3年を経過した被災経験を持つ自治体職員のPT

Gの獲得過程について明らかにし、考察することを目的とする。自らも困難な状況にさらされながらも被災者への支援をし、PTGを促している要因は何かを見出すことで、自治体職員のPTGをはじめとする生き方の道しるべを得ることができるのではないかと考える。

III 方法

PTGの獲得過程を得るために、本研究では、研究協力者自らの自然な自己表明を了解し、分析する現象学的アプローチに立脚した。

調査期間 2019年10月に実施。守秘可能な場所で約1時間のインタビューを実施した。

研究協力者 熊本地震によって自宅が全壊または半壊したが、現在は自宅を再建し、本研究の協力を希望した20代～60代の男女7名(A,B,C,D,E,F,G)の自治体職員に依頼した。

調査方法 フェイスシート(年齢、性別、家族構成、発生前の本務、被災時以降の職務内容、被害状況等)に回答してもらった後、インタビューを実施した。「被災前、被災時、被災直後、現在に至る状況や心境など」について、どのような経験・感情を持ったのか語ってもらった。研究協力者は自ら希望したものの、当時の辛さや苦しい経験を想起するため、トラウマの研究と臨床の専門である指導教員が同席し、フォローアップができるよう、万全の態勢で行った。

分析方法 本研究では、ジオルジ(2004/2013)を参考に、現象学的視点による分析をし、PTGに視点をあて、考察した。

IV 結果と考察

研究協力者7名それぞれのありのままの叙述(『斜体』)からテーマを見出した。それに対して先入見をできるだけ排除し(現象学的還元)、研究協力者のあるがままの叙述を了解するために、意識の全体的な体験を記述した。さらに、PTGの獲得過程に視点をあてつつ考察を試みた。

1) 叙述から得られたテーマ

Aから6個のテーマが得られ、『怒られっぱなし』

の避難所生活の中、元々言い返せなかった弱い自分から、「人間としての強さ」を少しずつ得ていく様相が見出された。その中で、あたたかい言葉をかけてくれる人々との関係が生まれ、地域のために、といった新たな可能性への志向性が育まれていた。Bからは7個のテーマが見出され、PTGを得られていることが窺われた。最年長ということ、地元への愛着、元々のポジティブで明るい性格が効を奏していることが考えられた。Cからは12個のテーマが得られた。被災当時は家事など何もできず、支援活動をせざるを得なかったこと、自宅を再建したものの、被災者の気持ちを考えると素直に喜べないという苦渋が語られた。しかし、家族や周囲が『認めてくれた』感覚が、他者への『感謝』へ繋がっていた。Dは他地域から被災地へ就職したばかりであった。自治体職員としての責任感（『村のための職員』）から、まだPTGといったポジティブな心理的変容までは至っていないように感じられたが、従来の『楽観的』性格がこれからの成長につながるのではないかと考察された。Eは8個のテーマから、『自分だけじゃない』と感じながら、また普段から信頼の厚い人柄から被災後も『周りに助けられた』『感謝』と何度も語り、『人との繋がり』がポジティブな心理的変容につながっていることが考えられた。Fからは7個のテーマが得られた。目に見えない力を感じながら『被災した人達同士の繋がり』を実感し、それが『癒せる』源になっていた。Gは8個のテーマから、『近所の方々』の『絆』に支えられ、新しい街づくりへの志向性が高まっていた。

2)研究協力者に共通したPTG

今回の研究で分析を行った結果、7名中6名が、個々のさまざまな経験の中で、それぞれのペースでPTGを得ている、あるいはその途中段階にあることが分かった。特にPTGの5つの因子の中で6名に共通していたのは「他者との関係」であった。この領域は他者との人間としての成長によるものであり、他の人とのつながりの中で経験される変化を意味する（宅,2014）。本研究の研究協力者は、被災者支援に取り組む中で、市民からの心もとなない言葉に傷ついただけでなく、居場所でもあった家を失い、葛藤した経験を語っていた。しかし、他者から支えられた経験によって自身の気持ちに変化が現れ、現在に渡って成長を遂げていること

が考察された。

3) PTGの獲得を手助けした要因

「他者との関係」だけでなく、7名それぞれのペースでPTGに至るポジティブな心理的変容を知ることができた。それぞれの経験から、「人間としての強さ」を自覚したり、「新たな可能性」を見出そうとしていたり、「人生に対する感謝」をも有している者もいた。それら個人のPTGを促進するに至った要因の一つとして、研究協力者自身の中で、当時を振り返りながらも体験したことを整理し、出来事の意味を模索しながら受け入れる姿勢があったのではないかと考えられる。特に、「振り返ること（出来事について違う視点で考え、今の自分を見直す心の動き）」と「自分の気持ちと向き合うこと（出来事を理解しようとし、どのように受け入れることができるのかを模索していくこと）」が見られた。これは、宅（2014）の見解とも一致していた。さらに、今回の研究協力者は、元々、その地域や「家」に愛着があり、市民との関係も良好で、責任感の強い人が多かった。それらの要因も新しい視点として今後の研究課題となろう。

【引用文献】

- ジョルジ, A (2004) : 看護研究と現象学的アプローチの動向
看護研究, 37, (5), pp421-429.
- ジョルジ, A (著) 吉田章宏 (訳), (2013) : 心理学における
現象学的アプローチ—理論・歴史・方法・実践, 新曜社.
- 北村秀明・橋輝・新藤雅延・染矢俊幸 (2012) : 自然災害の被災者におけるPosttraumatic Growth, 臨床精神医学41 (9), pp 1309-1313.
- ロジャーズ, C.R.著 (1972) : サイコセラピーの研究—分裂病へのアプローチ—, 岩崎芸術出版社.
- 高橋唱 (編) (2018) : 災害支援者支援, 日本評論社.
- 宅香奈子 (2014) : 悲しみから人が成長するとき—PTG, 風間書房.
- Tedeschi, R.G.&Calhoun, L.G. (2004) posttraumatic growth: Conceptual foundations and empirical evidence, Psychological Inquiry, 15, pp1-18.
- 全国知事会 (2016). 調査研究報告書 (平成28年度 全国知事会 自主調査研究委託事業) 熊本地震における応援職員派遣の実態と課題. http://www.nga.gr.jp/data/activity/committee_pt/h28kumamoto/index.html (最終確認日: 2019.1.20)